

フォニックス・ライム・チャンツ・歌を活用した 発音指導の教育効果

— TAE (Thinking at the Edge) を応用した分析 —

城 一 道 子*

1. はじめに

英単語の読み方が分からない、スムーズに読めない、読めてもローマ字を読むように読んでしまうという大学生は少なくない。本学では、中学の教科書レベルの音読⁽¹⁾を入学前課題として課したことがあるが、音読の重要性や必要性は理解しているものの、声を出して英文を読むことができない、CDの速度が速すぎて音声について読むことができないなど、自力で音読課題を進めることに困難を感じる新入生が多いことが分かった(城一、2012a)。また、多読で読語数があまり伸びない学生は、読み方の分からない単語を分からないまま放置する、ローマ字読みで対処するなど音韻処理に問題があるという実情も明らかになっている(城一、2012b)。

英語は読み書きが難しい言語であるとされるが、それは、文字を音声化するディコーディング(decoding)が難しいからである。文字に対応する音の単位が小さいほど、また、その対応規則が不規則であるほど、読み書きの難易度は高くなる。日本語の仮名は一文字が音節に対応しており、その対応規則は明白であるが、一方、英語は、一文字に対応するのは音素という音節より小さい音の単位で、しかも、他のアルファベット言語と比べても文字と音の対応規則が複雑で、読み書き

に時間がかかることが分かっている(鈴木・門田、2012; 門田・野呂・氏木、2010)。英語の読みの難しさを踏まえ、それに対応できる発音指導の必要性を感じてきた。

英語のアルファベットの文字列を読むことができる、言い換えると、どんな発音か分かるということは英語学習に欠くことのできない技能である。単語は読めないと覚えられない、また、発音できない単語は聞き取りもできない。単語が読める、音読ができる、つまり、音韻処理能力を身につけ、英語として妥当な読み方ができるようになれば、自立的な学習が可能になる。

上記で述べたような学生の実態を踏まえ、筆者の担当する英語音声学の授業において、音韻処理能力を身につけることを目指してフォニックスやライム、チャンツや歌を活用した発音指導を行った。本稿は、このような発音指導が受講者にとってどのような意味をもつのか、言い換えると、その教育効果とは何かについて考察することを目的としている。考察に当たっては、TAE (Thinking at the Edge) を応用した分析法を用いた。

2. 英語音声学における発音指導の概要

上記英語音声学は、音声学や音韻論の知見を生かしつつ、発音指導に重点を置いた実践的な科目として、英語科教員を目指す学生だけでなく学科を問わず興味関心を持つ学生を対象に開講された。その内容は、①日本語との比較をとおして英

* 江戸川大学メディアコミュニケーション学部

語の音声に関する理解を促す、②母音や子音の発音（調音）の仕方を指導する、③音の連続とイントネーションに留意した発音指導を行う、の3つを柱に、音素や音韻への気づきを促し、音素、音節、単語、句、文などさまざまな単位で音韻処理ができるようになることを目標とした。発音指導に、文字を見て自分の力で発音できるようになるためにフォニックスやライミングを、また、英語らしい発音を身につけるために歌やチャンツを採り入れた。フォニックスやライミングのようなボトムアップ的な手法は単語を読む際の正確さ（accuracy）を養い、これに対して、チャンツや歌のようなトップダウン的な手法は、縮約（contraction）、同化（assimilation）などによる英語の連続音声に慣れ、発話スピードが速くなるという流暢さ（fluency）を養う。読みの速さや聞き取りには流暢さが影響を与えと言われており、発音指導には、正確さと流暢さの両面における指導が必要である。このような指導法をどのように採り入れ、また採り入れた理由について、以下に述べる。

2.1 フォニックス・ライム

フォニックスは、文字とそれに対応する音の関係を意識的に教える指導法であり、英語圏では初期の読み書き指導として推奨されている。日本でも小学校での外国語活動が必修化されたことにより教育の場に採り入れられ、親しまれるようになってきている。フォニックスは、日本人学習者にとって、アルファベットは音を表す表音文字であることを理解し、ローマ字読みに頼らない英語の読み方を身につける方法として優れている。まず、アルファベットの26文字のそれぞれについて、文字が表す音の発音の仕方、たとえば、aは[æ]、bは[b]、cは[k]などのように、単語の中にあって最もよく読まれる読み方を指導する。アルファベットの文字と基本的な音の単位（音素）が結びつけられるようになると、たとえばcapは/k/ /æ/ /p/の3つの音から成り立っていることがわかり、また、capの英語らしい発音ができる

ようになる。

先に述べたように、英語はその言語の成り立ちから文字と音の対応が複雑で、英語の文字と音の対応の規則性は高くないと言われるが、単語をオンセット（頭子音）とライム（韻）に分ける⁽²⁾と、ライムの部分は規則性が増す。したがって、cake、bake、lake、makeなどのように韻（ライム）を踏む単語をセットにして読ませるライミングをとおして、文字と音の規則性を見出しやすくすることで、フォニックスのルールが帰納的に理解できるようになる。ライミングはリズムよく読みやすいだけでなく、音節や音素レベルに分ける力、いわゆる音素認識能力を高めると言われ、読み方だけでなくスペリングにも注意を向けられるようになる（アレン玉井、2013）。

英語の文字と音の対応を学習するフォニックスやライミングは、単語を速く正確に読む力、未知の単語の読み方を予測する力を養うだけでなく、未知の単語の学習に際して、本来の英語発音に少しでも近い発音をすることを可能にする。これらの知識は、読みの学習に困難を覚える学習者がその恩恵を受けられる（鈴木・門田、2012）だけでなく、教職課程の学生は、将来教師として発音指導に役立てられるであろう。

2.2 チャンツ・歌

チャンツは、単語や句、文などを丸ごと連続音として発音することで、強勢、リズム、イントネーションなど英語の韻律を身につけ、音韻処理能力を向上させることができる教材である。ライミングが豊富なマザーグースのチャンツや、文法を意識したチャンツ、ストーリー性のある絵本のチャンツなど、リズムよく復唱することで、英語の音声的特徴を体感し、いわゆる英語らしさを意識することができるようになる。また、チャンツの繰り返しの効用により、語彙や構文が「知っている知識」から「使える知識」になる内在化⁽³⁾という学習効果を期待することもできる。

歌は、文脈をともなった素材である。つまり、authenticな英語を丸ごと意味の分かる言葉とし

て口に出すことができるという点で優れている。また、cross-cultural な素材は、英語と日本語の解釈の相違に注意を向けることで、日本語への気づきが起こることや、既知の事柄に新しい視点を得ることがあるなど、思考を引き起こす認知的動機づけとなることが指摘されている（三浦編、1983）。本稿の英語音声学の受講者には、12月にクリスマスソング、また、ディズニー映画の「アナと雪の女王」の挿入歌である“Let It Go”を最終発表課題として使用した。英語学習には「恥ずかしい」「間違ったらどうしよう」などという心理的な壁がつきものであるが、心理的な壁を取り払うには、なりふりかまわず精いっぱい英語を使ってやるという機会を提供する必要があるという（松村、2009）。昨今の学生はリズム感もよく、カラオケが好きで人前で歌うことに抵抗が少ないと思われる者も増えており、歌はそのような心理的な壁を低くする機会として捉え、採り入れた。

3. 研究の目的・対象・方法

3.1 目的

本研究は、上記で述べたような英語音声学の授業における発音指導の教育効果について、以下の観点から考察することを目的としている。

- (1) 発音指導を受けて学生はどのような感じや思いをもったのか。
- (2) 発音指導は学生にとってどのような意味があるのか。

3.2 対象

本研究において分析の対象としたデータは、2014年度後期の英語音声学の受講者が授業最終日に提出した自由記述による授業の感想である。受講者の内訳は、心理学科19名、経営社会学科1名、マスコミュニケーション学科4名、情報文化学科15名の計39名、学年別に見ると、4年生2名、3年生1名、2年生20名、1年生16名である。

3.3 方法

質的研究にはさまざまなアプローチやデータ分析法があるが、TAEは初めて質的研究に取り組む人でも無理なく分析を進めることができる方法として、また、日常的振り返りから研究まで使える方法として提案されている（得丸、2010）。得丸（2010）によると、TAEは、フォーカシングの創始者として知られる臨床心理学者のユージン・ジェンドリンが開発した理論構築法で、「うまく言葉にできないけれども重要だと感じられる身体感覚を、言語シンボルと相互作用させながら精緻化し、新しい意味と言語表現を生み出していく系統だった方法（p.5）」である。TAEには、「それがそれ自身の事例である」というIOFI（instance of itself）原理の考え方、つまり、個人が感じる意味とは「普遍的なもの」の一つの実例であり、個人がそれぞれの実例を示し合うことで普遍的なものを照らし合い、映し出すことができるという考え方が根底にある。したがって、分析者が「どんな風を感じたか」というフェルトセンス（感受概念）に媒介されるデータを分析可能なデータであるとす。得丸が提案するのは、TAEのフェルトセンスを分析手順の中に理論的に位置づけ、系統的に活用するステップ式の分析方法である。

本研究において、TAEによる分析を試みるのは、一人でも分析を行える方法であること、また、得丸が考案したパターンシートを利用し、スモールステップで具体的に進めることで分析結果に至る過程を可視化することができるからである。TAEの分析には14のステップがあるが、ステップ9で終了することも可能で、本研究においては、「フェルトセンスから語る」というステップ1～5、「側面（実例）からパターンを見出す」というステップ6～9を用いて分析を行った（資料1）。分析に当たっては得丸（2010）が開発したシートを用いた。

4. 分析過程

4.1 「フェルトセンスから語る」 (ステップ1～5)

マイセンテンスシート(表1)を用意し、あらかじめエクセルファイルに入力しておいた上記の記述データを何度も読み返し、感じたこと(フェルトセンス)をことばにしていくと、「新鮮な体験」「英語が読める」「もっと早く知りたかった」「大きな財産」「苦手意識を克服できる」という語句が浮かんできた(表1②)。これらのフェルトセンスに照らし合わせて短い1文を作り、「発音は装備であることがわかる」(仮マイセンテンス)とした(表1③)。このセンテンス中で最も重要な言葉は「装備である」という語句である。これをキーワード1(表1⑤)として、この言葉の通常の定義である「備品を取りそろえる」「身支度を整える」また、「その備品や道具」をシートに記入した(表1⑥)。そのうえで、仮マイセンテンスの中核に(「装備である」という部分に)空所をつくり(表1④)、空所に当てはまる別の語をフェルトセンスから探し出し、「役に立つ」「使える」をそれぞれキーワード2および3とした(表1⑦および⑨)。「役立つ」は、通常の意味では、「使って効果がある」「間に合う」。「使える」は、「操ることができる」であるが、これらをシートに記入(表1⑧および⑩)し、通常の意味では表せない独自に感じた意味をキーワード毎に書き入れた(表1⑪、⑫および⑬)。その中から「身につけるべきもの」「経験を広げられる」「自分にもできる」という言葉を④の空所のある文に当てはめてみると、マイセンテンスの意味が拡張された文が生まれた(表1⑭)。さらに、フェルトセンスをとおして得られた文が、「発音を身につけることでできることが広がる」である(表1⑮)。

4.2 「側面(実例)からパターンを見出す」 (ステップ6～9)

まず、記述データの発音指導の教育効果として

重要だと感じられる実例にマーカーで印をつけながら、実例からパターンを見出す作業を行った後、パソコンを使い、パターン毎に同じパターンが表れている実例をまとめた。ある程度まとまった段階で、ワードで作成したパターンシート(資料2を参照)に、パターンシート1枚につき1つのパターンの実例とその他の実例(類似例)を貼り付ける作業を行った。作業を進める過程で、実例の類似性により、さらに、パターンを統合したり、分割したり、パターンを新しく作りなおしたりした。最終的に、次の7つのパターンに統合した(ステップ6および7)。パターンとパターンクラスター(実例群)はパターンシート別に資料2に示す。

パターン1: 発音の仕方を学ぶことは英語への興味・楽しさに通じる

パターン2: 英単語が読めるようになった

パターン3: 英語らしく読めるようになりたい

パターン4: 英語で歌うのは緊張するが楽しい

パターン5: 発音記号に興味・関心をもてるようになる

パターン6: 英語の発音ができることの重要性がわかる

パターン7: 英語授業へのイメージが変わる

次に、上記の7つのパターンをそれぞれ別のパターンの各側面(クラスター)と総当たりで交差させて、新たな気づきを得る作業を行った。交差シートは作らず、パターン1とパターン2のクラスターを交差させるときは、「1×2」として、気づきをノートにメモし、全部で7×6の42の交差を行った(ステップ8)。交差結果の一例は資料3に示す。

以上のステップ8までの作業を進める過程で気づいたことや得られた知見を、自分用のメモとして思いつくまま自由に書きだす作業を行った(ステップ9)。表2はそのメモである。

表1 マイセンテンスシート

①テーマ： 発音指導の教育効果		
②浮かんでくる語句（大切な語に下線を引く）： 新鮮な体験、英語が読める、 <u>もっと早く知りたかった</u> 、 <u>大きな財産</u> 、 <u>苦手意識を克服できる</u> …		
③仮マイセンテンス（最も大切な語句に二重線を引く）： 発音は <u>装備である</u> ことがわかる		
④空所のある文（仮マイセンテンスの二重線の部分を空所にした文を書く）： 発音は（ ）ことがわかる		
キーワードの通常の意味と、フェルトセンス独自の意味を書く		
⑤キーワード1 装備である	⑦キーワード2 役に立つ	⑨キーワード3 使える
⑥通常の意味 備品を取りそろえる、身支度を整える、また、その備品や道具	⑧通常の意味 使って効果がある、間に合う	⑩通常の意味 操ることができる
⑪フェルトセンスの意味 <u>身につけるべきもの</u> 、必要なもの、備えていなかった	⑫フェルトセンスの意味 <u>経験を上げられる</u> 、財産である	⑬フェルトセンスの意味 自分にも使える、 <u>自分にもできる</u>
（大切な語に波線を引く）		
⑭拡張文（空所に、すべてのキーワードと波線の語を並べた文を書く）： 発音は（身につけるべきもの、経験を上げられる、自分にもできる…）ことがわかる		
⑮マイセンテンス（フェルトセンスを短い一つの文にする。語も文型も自由に作る）： 発音を身につけることでできることが広がる		
⑯マイセンテンスの補足説明（他の人にもわかりやすくする）： 発音できることで、自分のできることが広がると予感する。これが発音指導の効果。		

表2 メモ

発音は楽しい。調音（発声器官を動かして音をつくる）は新鮮な体験。もっと勉強したい。英語が楽しいということが分かる。発音の仕方が分かると、単語が前より読めるようになると分かる。今まで読めなかった単語が読める。初めて見る単語の読み方を予測できる。単語がすらすら読める。「わかる」「できる」という実感がある。「できそうだ」という自己効力感。「できる」という報酬があるとやる気がでる。単語が読めるようになって、もっと英語らしく読めるようになりたいと感じる。歌を通して発音の練習するのはよい。思いのほかできる。人前で発表することに緊張感もあるが、一定の成就感、満足感がある。英語で歌うことに達成感を感じる。達成への内発的動機づけがある。英語で歌ってみたら新しい歌のように感じる。歌うとつながりが言いやすくなる。流暢さ（fluency）への意識。発音の仕方がわかると発音記号にも興味が湧く。発音記号の読み方はこの授業を受けなかったら一生わからなかった。発音を学んで動機づけが起こる。英語は言わなければだめだと分かる。読めることの大切さが分かる。発音はしっかりやるべき。発音できることの価値が分かる。発音は大きな財産。ばらばらの知識が結びつく。もっと早く知りたかった。知識は自分自身をよりよくしていくもの。堅苦しい文法だけが英語のすべてではない。英語授業のイメージが変わり、嫌でなくなる。発音は英語の苦手意識を克服できる。発音指導は必要とされている。

（ は学生自身の言葉であることを示す。）

5. 考察

上記の分析の過程で得られた気づきや知見をもとに、英語音声学授業における発音指導の教育効果について、発音指導を受けて学生はどのような思いをもち、また、発音指導は学生にとってどのような意味があるのかという観点から考察を行う。

学生の感想は、4.2に示したように7つのパターンがあるが、分析過程で得られた気づきや知見を加えて受講者の思いを再構成すると次のようになるだろう。

- ① 【パターン1：発音の仕方を学ぶことは英語への興味・楽しさに通じる】発音を学ぶのは新鮮な体験である。発音できるという実感をとまなう体験が報酬となって、英語を学ぼうという気持ちになる。
- ② 【パターン2：英単語が読めるようになった】文字列が読めるようになり、単語が以前より読み易くなり、初見でも読めるようになった。未知の単語の読み方を予測できることで「できそうだ」という自己効力感が生まれる。
- ③ 【パターン3：英語らしく読めるようになりたい】英語らしい発音の仕方がわかると、すらすらともっと英語らしく言えるようになりたいという流暢さへの欲求が生まれる。
- ④ 【パターン4：英語で歌うのは緊張するが楽しい】英語で歌って達成感を感じる。“Let It Go”の歌詞が「ありのままに」とは異なり新しい歌のように感じられる。
- ⑤ 【パターン5：発音記号に興味・関心をもてるようになる】発音の仕方がわかると発音記号に興味を湧く。
- ⑥ 【パターン6：英語の発音ができることの重要性がわかる】英語を学ぼうと発音できることの重要性、価値が分かる。
- ⑦ 【パターン7：英語授業へのイメージが変

わる】英語の授業は、文法のイメージが強くて好きではなかったが、発音の仕方を学ぶのは楽しい。発音できるようになると英語への苦手意識を克服できる。

このような受講生の思いに見られるのは英語を学ぶことへの動機づけが喚起されるプロセスである。発音の仕方がわかり、文字列が読めるようになると単語が読める、初見の単語も読める。「わかる」「できる」という実感に支えられて英語を学ぶ楽しさが感じられるようになる。もっと英語らしく言えるようになりたいという欲求が出てくるようになり、英語の歌を歌ってみると達成感が感じられ、また、発音記号にも興味を湧いてくる。このように発音を学ぶことで英語へのやる気が引き起こされるのは、発音は「取り組むに値する」という価値づけが行われ、同時に、英語を読むスキルを身につけることが「できるだろう」という効力期待⁽⁴⁾を生じさせるからであろう。

英語の授業では、一般に、発音は単語毎に丸ごと示されることが多いが、このようなやり方では、発音は覚えるものであり、覚えるという努力を強いられる。覚えるということは忘れるということでもあり、その結果、使用頻度の高いkiteは読めても使用頻度の低いkiteは読めないということが起こり得る。フォニックスの知識があれば、i_eの文字列に注意を向けることで、kiteの読み方を忘れていても、また、kiteが未知語であっても予測して読むことができるだろう。アルファベットの文字の音の発音の仕方や文字列の読み方のルールがわかるようになった学生は、丸暗記に頼らずとも単語は読むことができるということを実感している。言い換えると、発音は覚えるからできるようになるのではなく、発音の仕方がわかるから発音ができるようになるという感じや思いをもつようになっていえるのではないだろうか。「わかる」とは、「おぼえる」こととは異なり、「知らない」という状態に逆戻りすることがない(佐伯、1975)。発音指導を受けて、学生は、発音の仕方が「わかる」ようになっていく

ことを実感し、「わかる」ようになるプロセスをとおして、発音を身につけることへの期待や価値に気づくことができたと考えられる。

本研究のテーマに関しフェルトセンスによってつかんだテーマの中核を表す文は、「発音を身につけることでできることが広がる」であった(表1⑮)。「もっと早く知りたかった」という言葉に端的に示されているように、学生は、発音を学ぶことで英語学習に対する自分の気持ちに変化を感じ始めている。「わかるからできる」「わかるからおもしろい」「わかるから好きになる」という「わかる」ことで英語学習に向かう気持ちが広がるということが分析をとおして伝わってきた。佐伯(1995)によると、「わかる」ということは、「わかっていること同士が結びつく」ことであり、新しい「わからないこと」へ向けて、それも「わかりうること」だと確信して挑戦する力を与えてくれるものであるという。発音の仕方が「わかる」ということが挑戦する力となり、英語学習に向けて努力できるという期待を学生は持つようになっているのではないだろうか。英語の発音がわかるようになるということは、「英語の学び方がわかる」に通じる。英語の発音を学ぶということは、まさに、英語の「学び方を学ぶ」(“learn how to learn”)ことにほかならない。発音指導の教育効果とは、したがって、このような英語の学びに挑戦する力を学生に与えることができるということにあると言えるのではないだろうか。

6. 今後の課題

本稿で述べた英語音声学に限らず、筆者の担当する英語の授業では、折に触れてフォニックスやチャンツなどを採り入れ、発音指導を行っている。大学生に対しこのような発音指導をすることについて漠然とした手応えは感じていたが、その手応えが何であるかについて、はっきりことばにしたいという思いからTAEによる分析に取り組んだ。本稿は、正確には「39名の受講者が語る発音指導の教育効果」であるが、TAEによる分

析のステップ9までをとおして、発音指導にこれまで感じていた手応えがことばとしてまとめ、受講者の経験の意味を捉えることができたと思われる。

今回の分析に関しては、収集したデータに短文のコメントが多い、単年度の1回分のデータであるなど、限界があると感じている。より普遍的で具体的な示唆を得るためには、データ収集にあたり、あらかじめ質問項目を設定する、コメントの書かせ方を工夫するなどの改善の余地があるだろう。また、本研究は、学生の音韻処理能力がどの程度向上したかなどの直接的効果を測ることを意図したものではないが、直接的効果を測る量的な分析を加えることで、指導法の改善に資するだけでなく、より具体的な発音指導の教育効果に関する知見を得ることができよう。

7. おわりに

グローバル時代とは、だれにとっても、英語がいつ必要になるかわからない時代である。とはいえ、英語力がすべての人に同じレベルで求められるというわけではない。求められる英語力はそれぞれが遭遇する場面に応じて異なると思われるので、個人の必要性、必要度に応じて使えるという視点が必要である。外国語の習得は長期にわたるものであるので、学習方法や学習内容など自身の適性や個性に応じて自律的に、また、生涯にわたって自立的に学び続けることができなければならない。英語学習者にとって、文字を見て発音がわかる、自力で音声に変換できる音韻処理能力を身につけることは、英語学習を自分で進めるための「装備」(表1⑤)となる。松村(2009)は、「自分で正確に発音することに困難がある以上、一定の時間を割いてその力を伸ばすための指導をすることは必要になる(p.153)」と述べているが、発音に関し、十分な指導を受けて来なかった学生(実際その数は多い)のために、発音に焦点をあてた指導の必要性は高いと言えるだろう。

《注》

- (1) 音読課題とは、國弘正雄・千田潤一監修『英会話・ゼット・音読 続・入門編』(2004) (講談社インターナショナル) を教材に CD を聞きながら音読トレーニングメニューに従って音読の課題を終了させるというもの。
- (2) 例えば cake の場合、[keik] の [k] が頭子音で [eik] が韻である。
- (3) 内在化とは、心理言語学的観点からは、「語彙・語彙チャンク・文法などの言語情報やその他の情報を、知覚・理解し、長期記憶に転送・格納して、知識として定着させること (p.354)」（門田、2015）。また、第二言語習得の観点からは、「気づかれ、そして理解されたインプットを『学習者内部に採り入れる』こと」また「『理解されたインプット』が学習者の中間言語システムに取り込まれるプロセス (p.14)」をいう (村野井、2006)。
- (4) やる気に結びつくのは、「やればできるという気持ち」(結果期待)ではなく、「できるだろうという期待」(効力期待)である (杉浦、1996)。「努力できるという確信」とも言える (三宮、2008)。

参考・引用文献

アレン玉井光江 (2013) 「初期学習者を対象としたリテラシー教育—音声教育から文字教育へ—」(第2章) 卯城祐司・アレン玉井光江・バトラー後藤裕子『リテラシーを育てる英語教育の創造』学文社。

城一道子 (2012a) 「授業 (スピーチ・プレゼンテーショ

ン) の検証と入学前教育—英語基礎教養教育の充実を目指して—」『江戸川大学語学教育研究所紀要』10, pp. 1-11.

城一道子 (2012b) 「英語多読における成長する読み手のメタ認知ストラテジー (ある学習者のケース・スタディから)」日本リメディアル教育学会第8回全国大会口頭発表。

門田修平 (2015) 『シャドーイング・音読と英語コミュニケーションの科学』コスモピア株式会社。

門田修平・野呂忠司・氏木道人 (編著) (2010). 『英語リーディング指導ハンドブック』大修館書店。

松村昌紀 (2009) 『英語教育を知る 58 の鍵』大修館書店。

三浦省吾 (編) (1983) 『英語の学習意欲』大修館書店。

村野井仁 (2006) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店。

佐伯胖 (1975) 『「学び」の構造』東洋館出版社。

佐伯胖 (1995) 『「わかる」ということの意味』[新版] 岩波書店。

三宮真智子 (2008) 「学習におけるメタ認知と知能」(第2章) 三宮真智子 (編著) 『メタ認知 学習力を支える高次認知機能』北大路書房。

杉浦健 (1996) 「クラスの学習目標の認知が原因帰属と期待・無気力感に及ぼす影響について」『教育心理学研究』44, 269-277.

鈴木寿一・門田修平 (編著) (2012) 『(フォニックスからシャドーイングまで) 英語音読指導ハンドブック』大修館書店。

得丸さと子 (2010) 『ステップ式質的研究法—TAEの理論と応用』海鳴社。

資料1 TAE ステップ

ステップ 1～5：フェルトセンスから語る	
ステップ 1	フェルトセンスに形を得させる
ステップ 2	論理以上のものを見つける
ステップ 3	通常の定義で使っているのではないことに気づく
ステップ 4	キーワードに意味させたいことを書く
ステップ 5	キーワードに意味させたかったことを拡張する
ステップ 6～9：側面（実例）からパターンを見出す	
ステップ 6	側面を集める
ステップ 7	側面の詳細な構造を見る
ステップ 8	側面を交差させる
ステップ 9	自由に書く

資料2 パターンシート

パターンシート No.1	
パターン 1	発音の仕方を学ぶことは英語への興味・楽しさに通じる
実 例	・授業を受けて英語への興味が高まった
類似例	<ul style="list-style-type: none"> ・口の形や声の出し方から学ぶ英語は興味深く、新鮮だった ・英語の発音は難しかったが、興味深いと思った ・発音は難しいけど楽しかった。 ・音声学のさわりの部分しかやっていないがもっと勉強したいと思った ・発音の仕組みがわかった、もっと時間があればもっとできたのかなと思うので、これを機に英語に触れる時間を増やしていきたい ・英語についてたくさん学べたと思う ・英語はとても嫌いでしたが、英語音声学を受け、英語が楽しいということが分かり、好きになった ・勉強になることが多く、楽しく英語音声学を学べた ・元々発音は苦手ではなく、使う機会もあったので授業は楽しかった ・英語よりイタリア語の発音のほうが楽だと思っていたが、この授業でその考え方を考えることになった ・発音の仕方を忘れずにこれからも英語を学んでいきたい
メ モ	唇や舌を使って音をつくるのは易しくはないが、発音の仕方を学ぶのは新鮮な実感をともなう体験。体験が刺激となって英語を学ぼうという気持ちになる。英語の音声は英語への興味を引き起こす。

パターンシート No.2	
パターン 2	英単語が読めるようになった
実 例	初見で英単語を読むことができるようになった
類似例	<ul style="list-style-type: none"> ・初めて見る単語の読み方がわかるようになってきている ・意味の分からない単語でもとりあえず読めるようになった ・一目見て簡単には読めないような英語がスラスラ読むことができるようになった ・本を読んでいて見たことのない単語でもこんな風な感じだろうと読めるようになった ・初歩的な英語も読むことがままならないのでなかなか読むことができず、今日までやってきたが何となく前より英語が読みやすくなった気がする ・前より読めるようになったのでよかった ・英語の綴り合わせがきれいにできるようになった ・音声から読み方を考えることができる。もっと早く知りたかった
メ モ	読み方がわかる、実際に読める、未知の単語の読み方を予測できるようになり、自己効力感がある。もっと早く知りたかった。

パターンシート No.3	
パターン 3	英語らしく読めるようになりたい
実 例	英語らしく読めるようになったことが嬉しい、もっと長文をやりたい
類似例	<ul style="list-style-type: none"> ・リズムよく、流れで読むことを目標としていたので文や歌をもっとやってもよいと思った ・もっとすらすら言えるようになりたい ・どんなふうに発音すれば英語らしく聞こえるかということが聞けてよかった ・歌うとつながりが言いやすくなった ・アクセントに注意して発音していくようにしたい
メ モ	歌うと音のつながりがスムーズにいく。単語の発音だけでなく、すらすらと英語らしく読めるようになりたいという流暢さへの欲求が芽生える（accuracy から fluency へ）。

パターンシート No.4	
パターン 4	英語で歌うのは緊張するが楽しい
実 例	緊張していたがやっているうちに楽しくなった
類似例	<ul style="list-style-type: none"> ・少し恥ずかしくて声が出なかったが、実際やってみたら思いのほかできて自分的には満足 ・緊張したが、自分の理想とする抑揚で発表ができたと思う ・緊張したがよい経験になった ・英語は苦手だけど発表をやってみて楽しかった ・人前で発表する楽しさを強く感じた ・歌をとおして練習することはよい方法だと思った ・カラオケならもっと感情を込められたかもしれない ・機会があれば英語の歌に挑戦してみたい ・日本語と英語では全く意味が違うので、英語で歌ってみたら新しい歌のように感じた。
メ モ	発表は緊張するが歌うのは思いのほかできると感じ、達成感がある。「ありのまま」で「Let It Go」では解釈が異なることに発見がある。「生きた英語」は興味・関心を引く。

パターンシート No.5	
パターン 5	発音記号に興味・関心をもてるようになる
実 例	発音記号を学んで楽しかった。
類似例	<ul style="list-style-type: none"> ・あらためて発音記号を勉強できて楽しかった ・辞書の発音記号にもある程度興味が湧いてきた ・発音記号の大切さが分かった。今後はそれを参考にして積極的に発音していくようにしたい（特にアクセント） ・発音記号の読み方はこの授業を受けなかったら一生わからなかっただろう ・発音記号は簡単なものは分かるようになったのでよかった ・発音記号を学べてよかった ・発音記号を書いていて、（発音が）あいまいだったり、知らない単語が多かったことに気づいた ・発音記号をしっかりと書けるようにがんばりたい
メ モ	発音記号を学んだことがない。発音記号は役に立つと分かる。知ってよかった。複雑性に富んだ刺激は好奇心を引きだすことがある。

パターンシート No.6	
パターン 6	英語の発音ができることの重要性がわかる
実 例	発音はすごく大事だと分かった
類似例	<ul style="list-style-type: none"> ・英語を学ぶ上で発音は大事、大きな財産 ・発音は大事なので学べてよかった ・発音は非常に大切であると知る ・大変だったが、発音をここまでしっかりやったことがなかったので、すごくためになった ・難しい発音もあったけど何となくわかった、英語は言わないとだめだということが分かった ・書けるだけでなくしっかり読めることの大切さがよくわかった ・文字をただ読むだけではだめだと分かった
メ モ	文字を見てわかるだけでは十分ではない。声に出して読めることの重要性が分かる。発音ができることは財産。発音できることで次につながる気がする。

パターンシート No.7	
パターン 7	英語授業へのイメージが変わる
実 例	堅苦しい文法だけが英語のすべてではないことが分かった
類似例	<ul style="list-style-type: none"> ・英語はとても嫌いだったが、英語音声学の授業を受けて英語が楽しいということが分かり、好きになった ・他の英語の授業とは違ったので個人的には取ってよかった ・英語に対する苦手意識がなくなった ・英語の授業は好きではなかったがこの授業はよかった ・小学校のときの英語の続きみたいな感じで楽しかった ・英語音声学は楽しかった ・面白くてよかった
メ モ	英語の授業は堅苦しいイメージがある。発音の授業は楽しい。発音を学んで英語への苦手意識が克服できる。

資料3 交差結果表 (例) (パターン2)

交差結果表：パターンとパターンクラスターを交差し見出した新しいパターンを書く		
交差するパターン	パターン2	英単語が読めるようになった
交差されるパターンクラスター		新しいパターン
パターン1	発音の仕方を学ぶことは英語への興味・楽しさに通じる	単語が読めるという実感があり、英語を学ぼうという気になる
パターン3	英語らしく読めるようになりたい	単語が読めるようになりもっとすらすら言えるようになりたいと思う
パターン4	英語で歌うのは緊張するが楽しい	単語が読めるようになり英語の歌が歌えて楽しい
パターン5	発音記号に興味・関心をもてるようになる	単語が読めるようになり、発音記号に興味をもてる
パターン6	英語の発音ができることの重要性がわかる	単語が読めるようになり発音できることの価値がわかる
パターン7	英語授業へのイメージが変わる	単語が読めるようになり英語への苦手意識がなくなる